



田舎莊子

外篇
沙

樂

特
遠 13
326
6



田舎莊子外篇卷之二

龜蜩儒釈

汝又城よおわて蜩の入道靈角一過て曰

吾子、儒教よ執して仏法と信ぜし業結と忌

る事か、未だううに愚執、墮ちん事

と表ひのゝ我汝泥と信して津大紙

影ひ地獄とおそく事久し、汝未生、未生の

智、て仏道よ入まざる、天竺の校案と



田舎莊子外篇卷之二

あつて地獄に呵責とあるは、いかに誠なる地獄
 天堂のありさぬと自らいひて見せむ、
 地獄に云く地獄の事なりと云ふは、實
 義とあるは、世に於て出入りして道の志なく利
 害の失とありて心とありて、欲心の愚劣妄想
 嗔恚の鉄杖と提りて、愚癡を令しといひ入
 門に呵責する事、行阿の深なる是と三毒
 地獄といふ彼の欲心の愚劣、引きよめて

煥然と歩み暗くありて、さあ入て、前には
 見れず、まゝに、妄思に鉄杖に觸れて、愚劣
 畜生修羅刀山極の地獄に入て、苦
 めとあるは、何者の志とありて、さあ入て
 彼の愚劣、身と種に、さあ入て、欲心の愚劣
 とありて、我眼とありて、故に、彼愚劣と父母
 此と大切なり、ひに人れ、貴い此
 卷のゆゑと世界とあり、此と他と、此と常

と立或ハ瓶と瓶様と瓶大とあり猫と如て
秤にれねととそとと平元忌痛に答の
肉を佛く少くあるととくくといひ
わりく是と六道輪廻といふくく死
後の事といひ今生といひ答に肉と出
ぬといふ来といふも仏といふ人といふ
みく佛といふ經念仏我ためといふぬといふ
いふ人とねといふ念といふ念に飢といふ事

明く人の知りたる事ハ我が知あつても自らは
とるぬといふ念といふ一仏唯ぼとて
つとめといふ有れ極未淨といふと知に
我々も然れ地獄といふの何の罪を
てり本仏といふ一未世の眞福といふ人や
若学佛内は徹一自性本来の法陀と見
とる篤く信といふ教といふ良を良心の
親善勝のいといふ一といふ一といふ

事一いつい何ハ心作固有の法陀必来大光の放
て我より力とて人欲心の悪鬼と追拂ハ妄悪
鉄杖と臨あり悪魔の公以大雷ハ挺てお
くごとく地獄の爲作直よ云我々欲の極樂世界
とてさうと推心の淨土已爲ハ淨土といふ極
樂世界にあり何ハ入る事一すより皆我が法
當ハ後まゝあり天地と凡そ一と唯一
はるよりまゝとく釈迦如来よりと對面して

亦勸仏とも友とす金一法花よ所謂娑婆
即寂光土といふ者はこつが形ハ此淨土也
かよはるゝと學者とくく淨土の光の如く
欲心の悪鬼ハ追拂へ一妄悪嗔毒の鉄杖も
わく一唯惡魔ハ金も金なり一打碎か
惡魔の金碑もわくゆゑハ妄想ハ鉄杖又追
もてよ退さるゝ悪鬼とくくひまゝ
我と可責ハ一故ハ聖賢の心ハ法の説法

皆々々々たるさやうも既に今世に獄と
爲つた歎心の愚鬼と親く一切の事々々
げ愚鬼と後合極め妄想の決杖と我が
此室におりひきと痛むれと云々云々
に愚痴に空の肉とハな殿橋岡とおしひき
らうし時ハ卯とら物ありて我は襦とらとの
こ思ひて終よけ決杖の我と痛めいぎれ我と
費て費てらう事と云々いひてけーい紙

防てつとくつと苦くむ仏と信とら事々々
と云々も只仏壇の本像と祀りて是は佛と
わくくと我と愚と消滅とらとかりひき心
作の決杖と事々々事と云々と迷は流と
以て此本の目口と云々云々云々ハ光明を
放ちあふとわくと云々云々云々愚鬼と云々
とと舊友と云々云々云々云々我といひ
まふと云々云々云々云々云々云々云々

況や彼もさうじつものとや大六天に魔王と
 とも魔のほの腰あして空中と形わく者
 たりとも六魔の奴欲さふれ肉と翔まう
 めれれ政が衆先とてと討さじうまう
 と海危かまれば知恵の利剣よりわくどじは是と
 匠活さうまわさうさうものへ咄く云吾子我が
 木仏と礼さうと嘆く儒者神と立て父母
 先祖の靈と祀ハ何をや 電く云是仏者死に



此冥福と祈るゝ異し父祖の精神魂魄いま
歿して逝きしとてとて祀る所は在りて威
そのハ我が心の派より感格しあるを
去て逝き鬼神は形なきが故に若し形有て
虚空の中と流落せば祭るに祀りざる者の
鬼神ハ形なきべし鬼神ハ形なき人人心に
派し感格するのこたへてあるその念を
食ふハ何をも我が父祖とおもふが故に
心

肉は形なきものの念を食ふてある者ハ
人心の灵妙し意識を以て懐きてある
べきものなりけり懐きと者ハ祀せざるも宜し
祭と懐き祭と祀とを以て祀る
いふもその派より何ハ鬼神祭格するに
厭て来格せざるハわがとて祭る鬼神は
此祀儀するも又おのれ祀るに立る者を
我々と世に寄るなりとて或人朱子に曰

祭^{さい}祀^し之^の理^り有^あ其^{その}誠^{まこと}則^{すなは}有^あ其^{その}神^{かみ}無^な其^{その}誠^{まこと}則^{すなは}無^な
其^{その}神^{かみ}否^や 朱^{しゆ}子^し曰^い鬼^き神^{しん}之^の理^り即^{すなは}此^{こゝ}心^{こゝろ}之^の理^り也^{なり}
仁^に者^{もの}之^の泛^{はん}也^{なり} 至^{いた}生^{せい}下^げて他^た人^{ひと}と方^{かた}牛^{うし}と
方^{かた}馬^ばと方^{かた}人^{ひと}と方^{かた}子^こ孫^{そん}と方^{かた}法^{はふ}事^{こと}と方^{かた}法^{はふ}
とと既^{すで}判^{はん}別^{べつ}也^{なり} 然^{しか}る者^{もの}未^な格^{かく}して法^{はふ}
事^{こと}と受^うへるや 又^{また}牛^{うし}馬^ば漬^ひ漬^ひの工^く法^{はふ}
て何^{なん}ぞ受^うへて人^{ひと}と方^{かた}牛^{うし}と方^{かた}馬^ばと又^{また}同^{どう}
者^{もの}より別^{べつ}強^{きやう}して暴^{はう}急^{きふ}と方^{かた}人^{ひと}と

氏^し同^{どう}は祠^ほと立^たてまつるは不^ふ思^し義^ぎ也^{なり} 靈^{たま}あり
り祭^{まつ}りにあつる人^{ひと}と方^{かた}牛^{うし}と方^{かた}馬^ばと必^{かならず}
崇^{たか}り仰^{おほ}ふと方^{かた}人^{ひと}と方^{かた}鬼^き神^{しん}境^{かう}界^{がい}
の別^{べつ}も方^{かた}人^{ひと}と方^{かた}鬼^き神^{しん}の別^{べつ}も方^{かた}人^{ひと}と方^{かた}鬼^き神^{しん}の別^{べつ}も
とて死^しするものハ氣^き衰^{おとろ}へて死^しするものハ
明^{あき}の莊^{さう}年^{ねん}即^{すなは}暴^{はう}の者^{もの}究^{きう}憤^{ふん}と食^くて死^しする
者^{もの}ハも漬^ひ果^{くわ}の氣^き魄^{はく}は常^{じやう}てあつて散^{さん}
る事^{こと}より別^{べつ}れども方^{かた}人^{ひと}と方^{かた}鬼^き神^{しん}の別^{べつ}も

まうものこと古人も海ざり知らふ國民その
半生の淫暴と恐れ又も寛懐と合て死より
とひてま中は禍とならんこゝに淫暴く忘れて
と畏はれんがあらは彼の暴人の平日なむ
下れまうとひてまもあつれもあつれ
より邪氣と出てまもあつれまうのこゝに邪
氣も怖惧の人情もあつて暫く怪異の
事となつてこゝに狂理の人と誑くべしと云

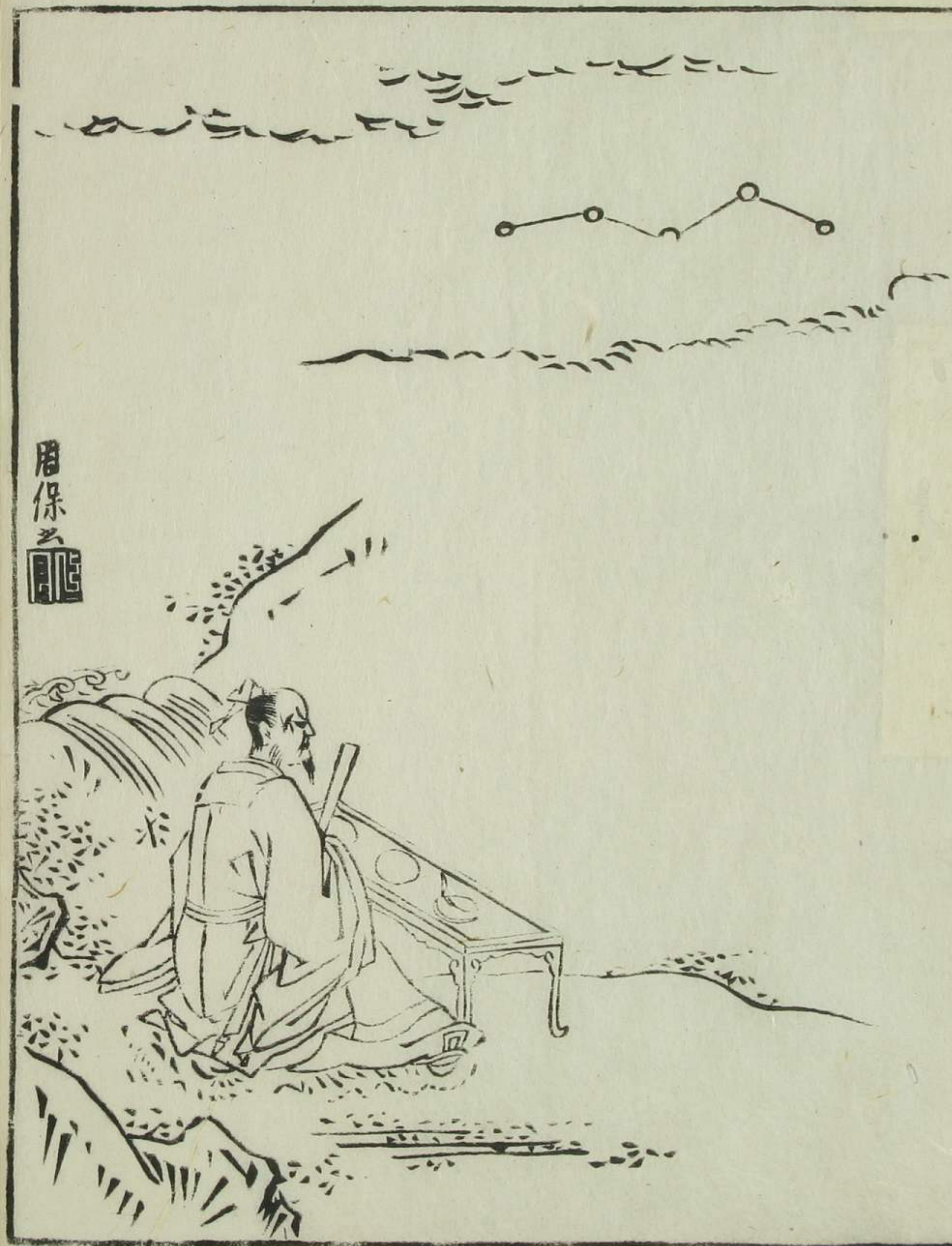
まも怖惧の虚は案じて誑くべしものなり
恐れづる人をも内決し氣充て虚を故に
あつれまうとあつれまうより鬼魁とてこゝに
内決するて虚とならん人よハ向ひ道なり
けうこゝにまうと誑くべし水林あり人
とひて淫暴くはあつれまうとあつてま
禍と西門甄といふ者も下れ守とあつれ
邪神とあつれとあつて巫祝と水に投じその

ありと止む能れん水津崇徳なりと事なり
 くに内明ふ神室にて教ふ事なく候
 伊と申とある今も日蓮宗一向宗なり
 ハ我が教じ仏の教なりと他は我の教なり
 世にもの知れん人より言ふれん世に決して教ふ
 しかる事なりと申す候はれども神も仏もあて
 無きものゝあれなく正しき法なりと心
 1にうつがぬは決りて迷ふ事なれり

況やめねの人とや常人に心主ありとあれ迷ひ
 て心持動もろろと大表れ七が別強をひく
 妖物とわきて鬼と失ひ候はれん
 つるもの暗さかみ迷ひて妖と迷へり
 若し正成の属にいつれんとも暗く迷ひる
 西へハ狐狸と座より家へて教へる事
 方ぐ一実事太平記綱目よりく記
 せり内暗さ時を心要動して神室より

故に迷ひて種々の事と違へて我々若くは
 そのく地ちちとふいつは盗とゆふは
 引われ入るもゆふは法ゆふは
 あやうなるへ入るとわくはるものこそ邪氣
 け靈と云ふやうなふたふたの火燄と
 といふも續て薪と流る時ハ光輝く
 滅せに死ねども薪流る時ハ火と力は
 滅も暴人の所も又かくれく民情怖惧

してさふがあらは薪とゆて果あう久く
 一信休信暮ら時ハ靈とのつゝ止む
 又同要方と信らるる若く夢極木の莊嚴と
 見如來のひて死りと告あふくも又忍人
 岡王此呵責と云ふて死らるゝ何
 ぞや云く留我心の業我心の岡王忍痛の妄
 ありて来れ若くも又神とわくす
 といふくは妄也の中も神あり神も又



周保

富言のこもま事い新ぐうにわを悪
 とし正直りて志も一なり不測
 の霊めろり何り知悪とひて信なと
 うに又悪わろ共の嗣王に可責と又見
 かこ子もろが悪と懼つわろれこ悪
 れろ人ささと知ろ共の神なり神ハ悪
 の畏ろ人ささと知ろとろとも悪はやめ
 さらもの欲そ以誘ハたり神と欲せ

内は固じて此愛なりとのいひて二つあるべ
かり其^{その}固王と愛する者ハ妄想の中へ受^う
ることを知りて神と此神と云ふ威^いとて若^わく
又死と云ふの事ハ神固じて此夢^{この}あり
何と神と云魂魄の主と云ふ^{いふ}て不
測の妙用と云ふの事と神と云ふ魂魄^{この}人
あり神と云ふ心^{こころ}に用と主と云ふ者は此魂
魄と云ふ是^{こゝろ}精気の具に耳目は視聴心は記

億の^{この}心は精の靈とて魄と司^{つかさど}り知覚
此發動心の思惟七情ハ感乃^{この}此気の具
なりと魂と司^{つかさど}り魄ハ陰とて文納と司^{つかさど}
る魂ハ陽とて經營と司^{つかさど}る魂魄相固
て用と云ふ相^{あい}部^ぶと云ふと人^{ひと}際^は時ハ
耳目は是^{こゝろ}偏^{ひとへ}と形の用と云ふと受^うて是^{こゝろ}以^{もつ}
て耳目乃^{こゝろ}視聴と云ふ魄と云ふ受^うて是^{こゝろ}以^{もつ}
魂と云ふと思惟と云ふと凡^{おほ}そ云ふと凡^{おほ}ハ

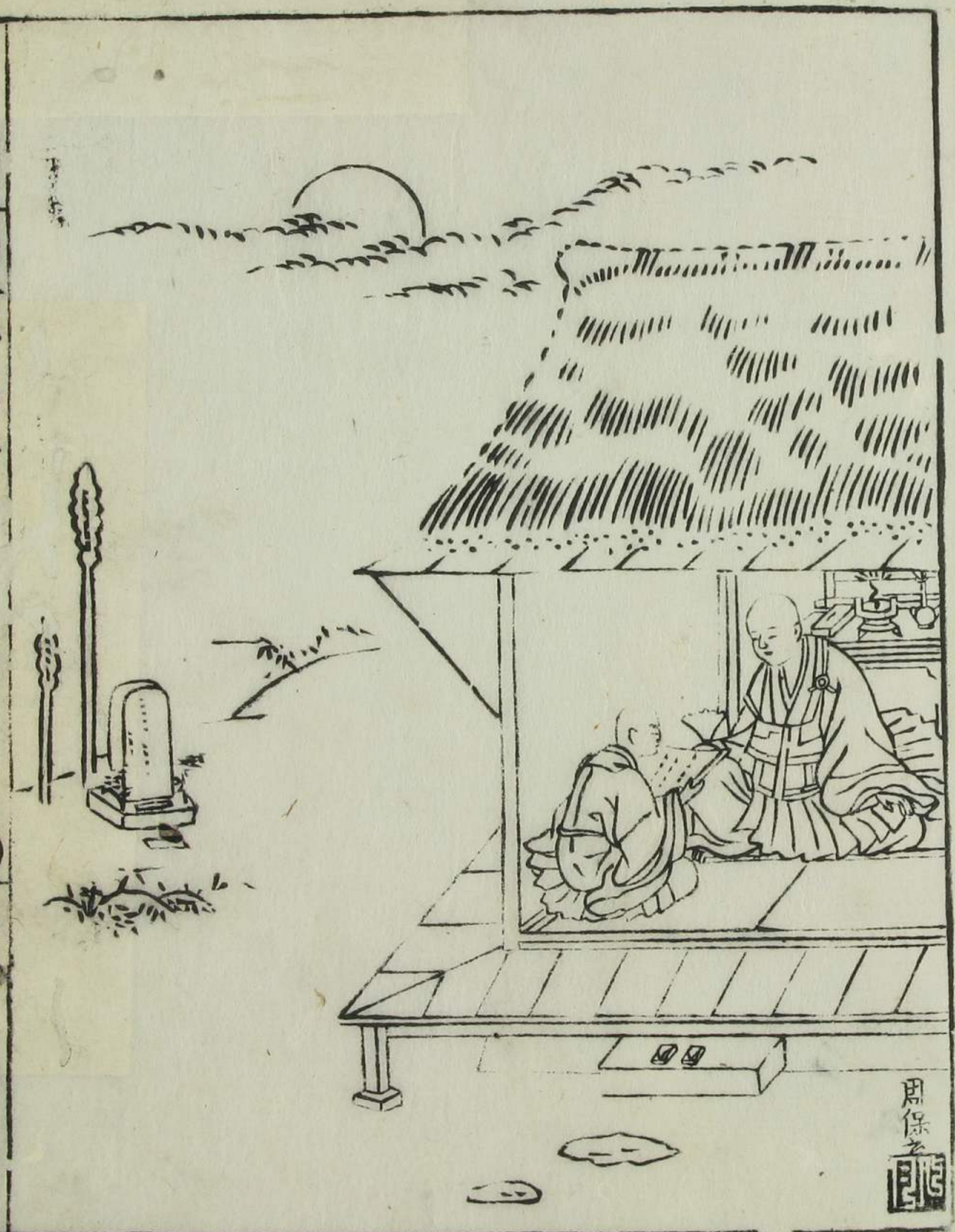
各年月より入てゆゑ通ひをと魄魂より更
 らうといふ寢る時年日視聴せしむる働
 りと形の日因て気ゆゑ常々魄魂より
 魄の記より年より更て更なりをと魂より
 といふ言れども不と云ふは夢なりと
 の事れ移りて縁て本年のうゝと夢
 見る事ありを石とて石の縁より川と
 夢みたりとわたりと夢みるるゝとくも移り

而も縁て思ひしゝぬ事と夢なりと事ありと
 是れ魄の記より年より魂より移り精神
 疲乏しと魂の動より認るゝと魂もぬと
 事と夢見る事あり大庭者より思ふ不魄より
 記しと魂より年より更て夢と事とありと
 常小情の動より年より夢なりと故に小人
 ありて君子は情と夢見るゝとく君子に
 して少人の夢なり

精神の非ハ氣と云々又理と雖も
神の非ハ神と主として心作の灵の歟
へうに誣へくざる者と稱又氣と云々
左傳に鄭の伯有死して屋中へ厲となり
て氏居る者大夫子產を告ぐ伯有の子
孫を立て祀と司馬遷の房帛止むと
云うは時法に非ずや中世より此を
もるは時なり子產知るる氣はな

へき道筋と云て可れと云々若くは氣
と云て導き池と云て油燈とかの例に
ると知り人情は氣の政あり又氣の
なりかゝる玉中に石ありはたは水の
平地に溢れ玉てなぐる可と云々
一水乃と對導て河よかす時になれて
海に到るなりこと此を氣の散る
溢れて由ふるに云て子孫を立て祀

あひういその澄れらの邪氣^よは世々^よわのり
 かりいつまう時^よ常^よかゝりて教^{えん}せざる事^よわさ
 らべ地^よ澄れらゆれ水^{みづ}区^くよ純^{じゆん}て川^{がは}流れ
 へつつかう海^{うみ}よ達^{たつ}まうらう一^{いち}家^けも塔^{たつ}
 婆^ばと建^{けん}設^{せつ}と知^してわあれて教^{えん}私^し一^{いち}あう
 乳^にとこにようま寂滅^{じやくめつ}の法^{ほふ}とて^て本^{ほん}末^{まふ}を
 わの大^{だい}河^かへちひくま一^{いち}知^しれ大^{だい}以^いの自^{おの}意^い
 を我^{われ}とと只^{ただ}る理^りがくのこ一^{いち}今^{いま}保^ほふをて



問よりいふ仙伝の方便多端あるはこゝに
此仙伝は況ふと自ら一極のハ言ふを
一極今儒仙と稱せしは極端とけり
そ父祖と祀るハ一極ておーか終るは
ありたかき一極ある飛と正は極一述は
おまへー我が誠心とけりば一極て儒法師は
ゆをせらるるハ心も一極
鬼神乃
妙用は言伝のそいふまじはに意識とひく

懐度まへにけり誠心僅よりこゝに感
通よりわける理ハものつて用く一極
能よりあるは仙ハ鬼神のうゝこゝに
道ハ法あり教を不中不ハ聖人此言と
とて皆乃の述とて述はるゝとて一極
とてと述とて道と悟るはとととと
上達よりいふ易の玄妙なるは今日学ふ
西ハト学て述とととととて自ぬて内

徹一教ひするも亦上達して下まれば上
達と求むべし二は是らよの非を言ふ云
達といふ文字も何も知るべき事し孟子
曰天下之言性也故而已矣故ハ利を以て
かく利ハ自然の勢ひといふ利害ハ利
を以てと私家ハ格実顕密といひて教と
主のとも云々一切の理ハ法花涅槃といふ
格法ハ顕教ハ自性と悟て流り交ても

人ハ流るもぬ所無密也新也宗もといひて
権実顕密といふ事ハ吾知むとて儒
といひていふ顔子喟然の歎曾子一貫此唯
密と密教といふ一も此中ハ密の事ハ
へり人の耳にいふぬといひてぬ我々
密と秘といふもぬといわぬ我々且妄言せむ
汝妄聴せよ

田舎外篇二

